日本人の各種動脈の粥状硬化症の 実態とその成因

＜司会＞ 田 中 健 蔵（九州大学）

司会者の意図と企画

田 中 健 蔵 *

粥状硬化症とは、脂質の沈着と線維化とを主体とする動脈内膜に主座をおく限局性病変であり、大動脈、総頸動脈などの弾性型動脈、冠狀動脈、脳動脈などの中、小筋型動脈にみられる。一般には線状脂質沈着巣、線維性硬化巣、粥腫へと進展し、高度な病変では石灰沈着、潰瘍形成、血栓形成などの合併病変を伴う。

臓器動脈の粥状硬化は、それ自身あるいは血栓形成などにより、内腔の高度狭窄、閉塞などをおこし、虚血性病変を発生させる。

この粥状硬化症は、全身の種々の動脈に発生し進展するが、各種の動脈でその程度に差がある。図1は総頸動脈より脳動脈における粥状硬化症を示すが、相連続する総頸動脈と内頸動脈とは著差のあることを示している。各種の動脈はそれぞれやや異なった形態学的、生化学的性状を有し、また血行力学的要因の影響などにも差があると考えられる。図2は大動脈をはじめ主要な動脈の形態学的特異性を模式化して示したものである。このような形態学的差異はそれらの血行力学的負荷に対する適応の表現であるが、これらが壁透過性に関連し、また凝固、線溶活性にも差異があり、またフィブリン沈着などに対する反応態度にも差異が認められる。従って、粥状硬化症の発生進展やそれを基盤とする疾患の発症を、各種の動脈で同様に考えてよいかについては、種々意見のあるところである。

粥状硬化症の発生進展の要因には種々のものが考えられ、また尾前会長が会長講演で述べたように、老化と粥状硬化症との間には密な関連性があると考えられる。

加齢、老化ないし老人病の問題がますます重要性を増している現在、日本人における各種動脈の粥状硬化症の実態

を明らかにし、世界的観点からみたその位置づけを行い、また現在までに明らかにされた発生進展の要因、臓器循環障害による虚血性疾患発生の要因を日本人の粥状硬化症という立場で纏め、その問題点を明確にすることは、大変意

図1 64歳男性の頸部ならびに頭蓋内動脈における粥状硬化（Sudan III 染色）

総頸動脈にはほぼ全面にわたり、ことに内、外頸動脈分岐部に高度の硬化がみられるが、内頸動脈ではサイフォン部以外には硬化はほとんど認められない、脳底部動脈の硬化も強い。

* K. Tanaka: 九州大学病理学教室

図 2 人体各種動脈の形態学的特異性.

義あることと考えられる。

本シンポジウムでは、この方面に造詣の深い 8 人の演者に、それぞれのグループでの多年の研究成果のなかから、

本シンポジウムの主題にそった成績を話していただき、充分の討論ができるように計画したつもりである。

* * * * *